フレーベル教育学における基本構想の展開に関する一考察

――父性から母性へ――

豊 泉 清 浩

キーワード：フレーベル、学校、家庭、幼稚園、父性、母性

はじめに
1　わがドイツ民族に寄せる
2　人間の教育の概要
3　時代の努力と要求とに関連する教育の根本原理、教育の方法、教育の目的
4　基本構想の展開
むすび

はじめに

フレーベル（F.W.A.Fröbel,1782-1852）の教育学は、当初、学校構想に比重が置かれていたが、のちに幼児の保育と家庭の改革、すなわち幼稚園に重点を移す。このような彼の教育学の基本構想の展開を、次の三つの論文の比較を通して考察することが、本稿の目的である。三つの論文とは、「カイルハウ小論文集」の一つである「わがドイツ民族に寄せる」（1820）[1]、『人間の教育の概要』（1833）[2]、そして「フレーベル自身の叙述による、時代の努力と要求とに関連するフリードリヒ・フレーベルの教育の根本原理、教育の手段と方法ならびに教育の目的と目標」（1850）[3]（以下「教育の根本原理」と略記する）である。これらの論文は、発表された時期から考えて、基本構想の展開を検討するのに適していると思われる。

三つの論文を比較することによって、学校構想による教育改革という目標が幼稚園に重点を転換するのに呼応して、神の強い父性が姿を消し、母性が

尊重されてくるのがわかる。それゆえ、フレーベル教育学の基本構想が父性に基づく教育から母性に基づく教育へと変化したものなのかどうか、またこのような父性から母性への展開が球体法則と関連があるのかどうかを考察することが、本稿の主眼となる。

1　わがドイツ民族に寄せる

カイルハウの学校案内第１号である論文「わがドイツ民族に寄せる」は、フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』(1806) の端緒を継承し、ドイツ民族の国民的再興が必要であるとの前提に立ち、その国民的再興は教育を通じて可能であるとの信念に支えられて、カイルハウ学園での陶冶計画についても言及している[4]。その際、ドイツ民族の国民的再興のための教育の基礎となるのはキリスト教であり、そのキリスト教は神の父性を根拠にする宗教であることを強調するとともに、またドイツ民族の特性を強調することによって、家族という単位から民族の教育を充実すべきことを表明している。

さて、カイルハウでの教育の根拠には、神と人間の関係がある。フレーベルは、「神はわれらが父であり、われわれの全生命をとおして成熟した壮年に至るまでわれわれを保証してこられたという、このまったく単純な経験の上に、われわれの行動われわれの活動のすべてが基礎づけられている」[5]と述べている。というのは、万物の真に完全なる存続は、神と人間、神と被造物との相互作用の中での正しい生活にかかっているからである。フレーベルによれば、神と人間との生きた相互関係は、昔から宗教という名で呼ばれているが、それゆえ生きた宗教に基礎を置く教育こそ、ドイツ民族に要求される。フレーベルは次のように述べている。「宗教の要請にしたがってわれわれが自己と他人とを教育し、その要請に長くかつ多く忠実に生きれば生きるほど、神がわれらの父であることをわれわれは認めるのである」[6]と。つまり、ドイツ民族の教育の基礎となり、ドイツ民族が依存し、生長する基盤となるべきものは、イエスの宗教、すなわちキリスト教であることがわかる。

キリスト教は、「万物は神から生じたものであり、万物は神が創り、神は万

物の創造主、神は産みの親、人間の父であり、人間は神の子である」[7]ということを教えてくれる。あらゆる物は、それ自身の内に必然的にそれを生み出した者の特性を含んでいる。フレーベルはいう。「子どもは両親の、とくに父の本性と精神と諸性質とをみずからのうちに担っている。そうであるから、神の子である人間もまた、かれらの創造主でありかれらの父である神の本性をみずからのうちに担っているのである。こうして人間は神的本性を担い、人間は神的存在なのである」[8]と。それゆえ人間の使命は、自己の内部に植えつけられた、神的存在、神的本性を表現し発展させることである。

フレーベルは、子どもは両親の内でも特に父親の本性や諸性質等を引き継いでいると見て、父親に重きを置いている。また人間の父と子の関係と同じように、人間は神の本性を引き継いでいると考えているが、人間の父親の本性を神の本性と同一視している点は、家族関係を考える上でも、キリスト教の父性原理を根拠にしてるように思われる。

したがって、フレーベルは次のように述べている。「父親の性格と本質とはしかしながら、個別の中にもできるだけ完全に、特に父親の似姿であるところの息子の中に現われて、その中で自己を形成する。だが父親が自分の精神と本質の多面性をもっとも完全に見るのは、かれの息子たち全体の中である」[9]と。フレーベルは、父親の性格と本質は、とりわけ息子の中に現われると考えるが、このことは父と息子の関係は、神とイエスの関係に等しいと考えることによるのであり、この父と息子の関係は、神の父性を背景として、家父長制を示唆していると考えられる。

フレーベルによれば、人間の使命は、人間は行為と思考、表現と認識とを通じて、一切の発展の根本法則、多様性へ向かっての統一性の、あるいは統一性からの多様性の発展の根本法則に従って、統一性と個別性と多様性の中での唯一の本質の三通りの表現を通してその中で、かれの本質の意識と理性とへ達するということである[10]。このことは、一切の教育の根本法則であり、カイルハウ学園における教育原理である。自分の本性に即して、神と自然と生命が定めたものに向かって教育され、形成された生徒は、彼が自分のもの

として認識した天職へと歩み入ることができる。

この学園で目指す教育が成功するためには、人間相互の信頼が基盤になければならない。「他の一切のものが流れ出てくる根本の欲求、根本の要求は信頼である。自分への信頼、他人への信頼、かれに対する他人の信頼である。」[11] 家族は、最高で完全な三重の信頼を要求する。父、母、両親は、子ども、すなわち息子や娘を信頼していなければならない。子どもは、両親に対して信頼を持っていなければならない。子どもたちは、互いに信頼し合わなければならない。さらにフレーベルは、民族全体も信頼し合っていなければならないと考える。

教育は国家の要請である。その際、フレーベルは、とりわけ、「人間精神、人間理性に他ならぬ人類に対する信頼のための教育」および「万物の創造主にして父なる神への信頼のための教育」が重要であると考える[12]。このように教育された人間は、自己と人類と神に対するこの三重の信頼と、そのための教育の中に、欲求と要求とが最終的に含まれているのに気づく。

フレーベルは、ドイツ民族の特徴を次のように述べている。

「わが民族はあいかわらずドイツ原民族なのである。」[13]

「わが民族は仕事好きで、まめで、活動的な、力強い、勤勉な民族であることをわれわれは知っている。」[14]

「われわれはこの民族を思索的で、科学的な民族であると思う。」[15]

「ドイツ民族は造形的で、器用な民族である。」[16]

「被造物と創造主――人間の父なる神と神の子なる人間――の間の生きた相互関係、心情の最深部に開現したこの直観された相互関係を、この民族は明るい明晰な精神でもって認識し、純粋で聖なる生活の中で実現しようと努める。」[17]

「わが民族は父なる神の目的を認識し、それを自己の目的とし、それを実現するためにはすべてを犠牲にしようと試みてきた。」[18]

「かかる父性的宗教の意味と精神における生活こそ、ドイツ人にとっては根本要請なのである。」[19]

「わが民族は宗教的で、敬虔な民族である。」[20]

「わが民族は家庭的な民族である。」[21]

「わが民族は真に歴史的民族である。」[22]

ところで、フレーベルは、教育の主体は教師ではなく神であるとの認識に立っている。だから、教師によっては何事も起こらないのであって、人間の父なる神と神の子らである人間との間の永遠の生きた相互関係を証明することなしには、また万物の創造主、あらゆる人間の父なる神との究極的な関連の中でなければ、何事も起こらないのだと強調する。フレーベルは、「こうしてわれわれにとっては宗教教育はわが教育の頂点である」[23] という。つまり宗教教育こそ、教育の究極の目的であり、また教育の基盤なのである。

フレーベルは、彼らの教育的な努力と活動とに関して、「一般的民族教育、人間性と人間精神一般の本質、とくに民族の性格、本性、精神に十分に合致した、全体のあらゆる成員ひとりひとりの教育による――民族形成のための一般教育を、われわれはかかる仕事と認めるのである」[24] と述べ、この学園で実践している教育は、ドイツ民族に対する一般教育であると言明する。また、「この仕事は人間精神そのものと同じく、民族とともに、民族の内的外的形成とともにつねに前進していく仕事であり、その果実が父から息子へ、息子から孫へと受けつがれていくところの仕事である。」[25] フレーベルは、この教育の仕事を父親から息子へと代々受け継ぐべきものであると認識しているが、ここにも家父長制が現われている。しかも、「このような仕事は民族の最大の宝であり、最大の富であり、真の国民的富である。」[26] フレーベルは、この教育の仕事こそ、ドイツ民族の国民的再興という目的を実現する基礎であると確信する。「人間の精神が永遠不滅であるように、これは真に永遠不滅の仕事である。これは人間精神の、わがドイツ精神の最も価値ある仕事、純粋に人間的な民族であるわがドイツ民族の最も価値ある仕事である。」[27]

つまり、カイルハウ学園での教育は、家父長制を前提としつつ、神の力強い父性を根拠にした宗教教育を基盤にして一般教育も行なうことによって、ドイツ精神を再興し、ドイツ民族の結束を強化し、ドイツ民族の生活を向上

させることを目指しているのである。

2　人間の教育の概要

1833年に、スイス時代のフレーベルにとって唯一の出版物である『人間の教育の概要』が出版されている。この論文は、すでに1830年10月に完成していたが、検閲のためにドイツでは出版されずに、スイスで刊行されなければならなかった。『人間の教育の概要』は、すでに諸々の学校案内の中で示されていた国民教育、すなわちすべてのドイツ人のための教育プログラムを取り上げ、またフレーベルの政治思想に関する洞察をも与えてくれる[28]。

フレーベルは、「この教育は、万物、つまり世界も、自然も、神や神の存在、および本質の直接的な開示であり、神の直接的な自己開示であるという確信、また、人間は現われ出たものとして、また、現われ出ているものとして、それ自身神の現われの本質的な部分であるという確信によって実現される」[29]と述べている。つまり、この教育は、万物に神的なものが宿り、人間は神的なものの現われであるという前提に支えられている。したがって、「この教育は、人間や子どもを、神、自然、および人類に所属するものとして把握し、陶冶するのである。」[30]

この教育では、誕生から始まるあらゆる発展段階が重要であり、あらゆる人間は「自己の中で神的な生の閃きを眠らせている芽」である[31]。あらゆる発展段階は、神的なものの認識にとって、発展の制約された通過点を意味する。

この教育を通して、人間はどのような身分や職業にあっても、自己の統一性の中に、普遍的なもの、全面的なものを把握する。「この教育によって、それゆえに、人間は個人的、特殊的な存在ではあるが、普遍的で、全体的なものとして陶冶され得るのである。人間は自分がいかなる低い陶冶の段階にあることを見出しても、自己陶冶と自己教育によって、絶えず前進する合法則性の中で、また個人的素質と個人的必要とに従って、おのずから次の段階へと継続的に教育できるであろう。」[32] なぜなら、この教育は、すべての教授と同様に、一つの方向も無視することなく、また一つの優れた方向も低下させ

ることなく、すべての特殊な存在や個人の発展方向をたえず拡大しつつ、維持しつつ、把握しつつ、前進するからである。また、この教育は、先行するものによって常に後続するものを基礎づけ、また後続するものを先行するものから、内的な制約と規定に基づいて、その特定の場所に生じさせるからである。つまり、人間は、自己の現在の中に、同時に、すべての過去およびすべての未来を統一し、見出しているのである。

フレーベルは、自然は、われわれにとって神聖なる書物となり、神聖なる啓示の言葉ともなると考える。「汝の真なる父は真なるもの、明白なるものの中に住まうのである。かれは愛であり、汝を愛するのである。神はわれわれの父であり、また汝の父でもある。」[33] 生活の言葉、家族の言葉、民族の言葉へ、この自然を置き換えることを必要とする。また、世界の発展や人類の発展と一致する教育は、自然が与える。というのは、自然は、万物に内在している内的法則を表わしているからである。

フレーベルは、自然に関してさらに次のように述べている。「この自然は、自然をその存在において制約されたものとして、また父の愛の意志によって現われ出たものとして、従って、あらゆるものの中には、父の存在、父の意志、父の愛の象徴や記号があるということを示しており、（人類の、神および自然との親しい二重の結びつきによって）人間の最も特殊な個人的な制約において、同様に人間の最も崇高な、普遍的な関係においても、自然の発展過程や人類の発展過程の象徴であり、また個々の生や個々人の象徴であることを示しているのである。」[34] フレーベルは、学校の教科として自然を重視し、自然の観察や考察から永遠の法則の自覚に到達しうると考えている。自然は、事実への神の啓示であり、また神の行為の啓示であるように、自己の生も他者の生も、現在の生も過去の生も、個人および家族の生も、国民や国家の生も、すべての生である父の源泉、つまり神の生の啓示となるのである[35]。「かくして、自然が、いわば生および生の認識や表示と関係しているすべてのものの、やすらいだ、無言の事実や行為の像であるごとく、運命や出来事、人間の境遇や状態は、人間の生をいきいきと語っている象徴なのである。」[36]

フレーベルは、「わがドイツ民族に寄せる」と同様に、『人間の教育の概要』においても、神の父性を強調する。「神は、現に世界の支配者であり、人間の父であり、昔に劣らず、力強く、賢明で、善なるものなのである。」[37] 神は、人間の父であり善であることによって、力強く人間を導く。「それゆえに、この教育、教授法は闇を追い払い、光へと導くものである。というのは世界の神、人間の父は光の神であり、光の父であるからである。」[38] 神は人間を指導する光となり、この教育法は、万物の中に神を知覚し、直観する。この教育は、思考と感覚と行為において真理を教え、さらにその実行において、真理、善、美という偉大な三者の親密な関連を示す[39]。この教育および教育法は、ドイツ人に民族的行為を要求するもので、それゆえ分裂や分離ではなく、統一と連続の教育法である。この教育法は、個別的なものの中に全体を、特殊的なものの中に普遍的なものを直観することを教示し、同様に、普遍的なもの、統一的なものは、特殊的なもの、個別的なものがそこに存在し、現象しうるということ以外の何物でもないということを教示している。

フレーベルは、この教育法がすべての人を対象としていると強調している。この教育法は、ドイツ民族すべてのものであり、各人をその本分と天職へ導くものである。「この教育法、教授法は、いかなる身分も、いかなる職業も、排除しないのである！否、それはすべての人をかれの身分や職業の本質へと、その忠実なる義務の履行へと導くのである。」[40] それどころか、この教育法は、神学者に、聖書を通して、神の啓示を誠実に、真に教えるのみでなく、われわれの眼前で、また自然や自己の生の中にあって、われわれの精神や心情の中で発展し続けている、神の啓示を読み取るように教えるし、また真の牧師、教区の牧師として、彼の教区の構成員たちに、このことをわからせ、暗示することを教える[41]。さらにフレーベルは、この教育法は、自然の中に、人間の発展法則や生の法則が見出されることを法律の教師や医者にも教えると考える。

さらに、この教育法は、哲学者に教えるものを持っている。フレーベルはいう。「この教育法は、多くの者によって長い間求められてきたし、また熱望

されてきたが、僅かの者によってのみ見出され、一部の人にしか認識されず、いわんやその本質においては殆んど知られていない女神を哲学者に紹介するのである。というのは、この教育法は宇宙を築き、最も小さな自然の事物の中にも最も大きな事物のうちにも、この女神を知らせる知恵を、また冷静に探求する単純な眼に、明白に提示する知恵を知るように教えるからである」[42]と。この女神とは、ギリシア神話における思索の神ミネルヴァのことを指しているものと思われる。だから、この女神が意味するものは、フレーベルにとって真の哲学ということになろう。したがって、この教育法は、発展法則の内において、自己の生の発展の全体において、永遠の法則を知るように哲学者に教え、哲学を、生の知恵へと高めるのである。

ところで、この教育法は、いかなる職業も、全体の必要な部分の現われであると保護し、外的で賤しい仕事に見えてもそれが天職であることを教える[43]。この教育法は、田畑の耕作のみならず、手仕事や生計の仕事一般に意味を与える。この教育法にとって、言語は静止している状態におけるだけでなく、たえず拡大していく継続的な陶冶の推移においても、内界や外界の表示である。したがって、この教育法にとって、言語は人間の精神による世界の第二の創造、模倣であるし、同じ法則による不断の世界の形成、発展なのである[44]。この教育法は、母国語、すなわち根源語としてのドイツ語を習得することが、すべての言語や言語そのものの把握のための根本条件であることを教える。

この教育法は、思考や、数、形、量の思考法則を、その内容、働き、生に従って、空間や時間を通して、さらに時間や空間において、象徴的に形造ることを教える。「このようにしてこの陶冶法は、自然のそれぞれの発展段階の内で、また、あらゆる段階の間に対して、全体的自然のあらゆる形式や形態の統一や唯一なるものを、関連づけて直観することを教えるのである。」[45] この教育法は、数学を、生や生の学へと導き入れ、また生から自然や自然の学へ導き入れる。

この教育法は、ドイツ人が追求し、希望し、願望し、熱望するすべてのことを成就する教授法である。この教育法は、まさに普遍的なものである。フ

レーベルは、この教育法がキリスト教に基づくものであることを言明している。「この教育法は、宗教に関わるものであり、力および知恵と寛容さ、真理と光、愛と生との和合や、統一であるところの宗教から発芽し、宗教に基礎づけられているのである。この教育法は、イエスの宗教であるキリスト教から発芽しているのである。この教育法は、宗教そのものに属するのである。」[46] この教育法は、精神や真理の内にある神を、唯一の生き生きとした神として、父として認識し崇拝することを教え、また神の子どもである人間が、神と一致する生の内において、神そのものを尊敬し、神に仕えることを教える。

この教育法は、教会、学校、生活や経験、創造する生、学問、芸術、心情にも愛にも所属している[47]。この教育法は、敬虔な家庭生活において認められ、家庭や家族、父の家、祖国に所属している。この教育法は、多様性の中に統一性を直観し、統一性の中に多様性を見ることを教え、さらに内的なものの中に外的なものを、外的なものの中に内的なものを、そして双方の中に双方を結びつけている神の存在を見ることを教えている[48]。

この教育法は、瞬間的な時代や、通り過ぎ去るだけのこの特定の時代とともに来ては過ぎ去って行く時代に所属するのではなく、まさにすべての時代に所属する[49]。この教育法は、限られた時間に所属するのでもなければ、限られた空間や場所に所属するのでもなく、自然に所属するのである。この教育法は、今や時代やドイツ民族の根本要求として迫って来る。フレーベルは、「われわれは、それゆえに、すべてのドイツ人に、全ドイツ民族に、全体的な統一民族の行為、つまり国民的行為として、この教育法、教授法を遂行し、実行し、また表示するよう要求するのである」[50] と述べている。

3　時代の努力と要求とに関連する教育の根本原理、教育の方法、教育の目的

「教育の根本原理」は、1850年に発表された。フレーベルが、一般ドイツ幼稚園を設立してから10年がたち、幼稚園と恩物の普及に努めるとともに、女性保育者の養成のための施設を拡充していった時期である。その一方で、1851年８月23日にプロイセン政府は、幼稚園禁止令を告示している[51]。この晩年

の時期は、幼稚園の普及に尽力するとともに、幼稚園禁止令の撤回を求めるという、フレーベルにとってまさに自分の信念をかけた闘いの時期であった。したがって、この論文は、ドイツ民族だけではなく、また人類にとっても教育の基礎において幼稚園が必要不可欠なものであることを強く訴える内容となっている。

フレーベルは、まったく一般的に決定的に人間や諸民族を動かし、時代にその性格や全体的な表現を与え、時代精神を形成し、時代の努力目標を規定しているものは、教育であり、教育への努力である、と認識している。時代の教育的努力を特徴づける個々の要求は、次のことである[52]。

第一は、人間を、個々人においても、全民族においても、全人類においても、自己自身へ還らせることである。すなわち、人間を自己理解と自己意識へと向け、自己創造と自己活動へ駆り立てることである。

第二は、人類を教育する一つの働きとしての母親や全女性の、強い自然衝動や生命衝動によって規定された行動を、本能的なものから解放し、明瞭な意識、正しい認識にまで高めなければならないということである。つまり、フレーベルは、本能的にある母性的なものを、教育され、自覚された真の母性にまで高めなければならないと考える。

第三は、全女性が、自己の使命と品位を認識し、この使命と品位との要求に応じて生活するように高める努力である。これは、女性の地位向上と男女同権の思想である。

第四は、子どもおよび幼児期の生活といえども、すでにその価値および品位において、それぞれ一つの全体として認識され顧慮されなければならないという要求である。つまり、子どもの品位や幼児期の品位を、一個の自己完結している全体として、また「天国は子どもたちのものである」というイエスの言葉に従って人類を発展させ表現するための萌芽として認めようとする努力である。

第五は、家庭生活（父・母・子および兄弟姉妹の生活）を一つのそれ自身完結したものとして、真に純粋な根源として承認することである。

第六は、共同社会の生活の一部としての家庭生活の承認は、共同社会と、利益社会的・国家的な、したがって社会的・政治的な関係との一致と協同を意味する。つまりそれは、家庭生活と共同社会の生活との間の相互関係の育成の確立と承認である。

第七は、家庭と学校の関係を確立する努力であり、さらにまた両者の教会に対する関係を確立する努力である。厳密にいうと、感情・心情・思考・精神および実践的生活などの間の関係を確立する努力である。

第八は、形式も、物質や材料（金銭）も同様にその力を失い、これに対して、真の思想、美しい理念、純粋で善良な志向、要するに精神が力を得ているということを明示することである。

第九は、自然、人類および神との全面的な生の合一への努力である。

フレーベルは、外見上は困難なこのような要求に応じること、またこの重要な人生の課題を解くことは、次のことによってまったく簡単にできると考えている。「すなわち、かの園丁や農夫が、彼らの作物を自然との全面的な関連において完成させ、あらゆる要求に応じて育てているのと同じような方法で、子どもや人間を、その本性、その内的法則に忠実にしたがい、生命や自然との濁りなき融合において、一切の生命の根源との絶えざる融合において観察し、発達させ、そして教育し陶冶するように、われわれが努力することによってである。」[53] 子どもや人間を、このように生命との全面的な関連において理解し取り扱うことは、第一の最高の原理として、すなわち人間教育の主要な要求として現われる[54]。

一つの全体の中にあるものは、その全体の最も小さな部分にもあるものであること、したがって全体としての人類の中にあるものもまた、すでに最も幼い子どもたちの中にも現われるものであること、さらに全体としての人類の中にあり子どもの中に本性や萌芽としてまどろんでいるものもまた、子どもの本質の最も小さい部分に現われているということ、これが第二の主要原理である[55]。これは、部分的全体の思想に基づく思考法である。

第三の本質的な教育原理は、内的な発展、または内からの発展が、内から

働きかけてくる衝動に結びついているように、外的な形成もまた、外から作用する刺激に依存していて、これら二つのそれ自体互いに対立しているが同等の条件は、産物または成果としての、まさに両者を自己の内に融合している統一的な生命、すなわち教育され陶冶された人間を生み出すということである[56]。

第四の発達法則、教育法則、陶冶法則は、対立しているが同等である条件（要素）の共同作用によってのみ、また生活の中で生活を通じてこれらの条件（要素）を比較し媒介する共同作用によってのみ、子どもや人間は真に人間にまで形成されるということである[57]。

これらの教育の原理および陶冶の原理を真実なものとして承認する人はだれでも、その原理の応用や実行を、まず第一に自分のもとで始め、次に彼が預かっている幼児に始めなければならない。またすべての教育者、特に女性、まず第一に妻や母たちに、またすでにいくらか成長した娘たちや教育の助手たちにも、これらの根本原理を手ほどきするよう努力しなければならない[58]。これらの根本原理は、女性たちの自然衝動を純化し、強化し、それを意識にまで高め、確固とした首尾一貫した不断の実行にまで高めるための手段を提供する。

ところで、フレーベルは、女性が人間の最初の教育者であるという理由から、人間の教育を女性の仕事としてのみ限定することは一面的であると考え、当然、教育における男性の役割も尊重する。「より多くを（外から）教える男性は、前に述べた必然的な対立法則にしたがえば、（まさに未来の教師として、保護者として、形成者として、また家族・共同社会ならびに民族の未来の父として）人間教育において、より少なからざる役割を演ずるものである。そして教育への男性の協力は、単に少年期や青年期から始まるだけでなく、すでに幼児期から始めなければならない。」[59] フレーベルが、幼児期の教育の段階から男性もかかわるべきであると主張しているのは、その時期から子どもを父親の使命に導き入れ、子どもがその使命を果たすのを援助する必要があると考えるからである。「人類は、子どもとして最初に現われ出ると同時に、

その二重の存在において、すなわち対立してはいるがその他は全く同等である二つの並行する性（Seiten=Geschlechter）として考察されなければならない。」[60]

フレーベルは、真の発達・陶冶および教育はすべて、心情の中にその萌芽と源泉とを持つものであるから、この心情は必然的に、またすでに早くから、子どもの身体や四肢や感覚や精神などの最初の発達においてさえ、それにふさわしい養分を見出さなければならない、と考える[61]。「こうしてリズミカルで拍子にあった運動と調和的な歌とは、必然に、幼い時から、人間の本性を全面的に充足させる人間教育、したがって健康な人間教育の一部をなすものである。」[62] このような理由から、フレーベルは、『母の歌と愛撫の歌』に実際に例示されている、幼児期や乳児期のための小さな遊びである身体・四肢および感覚器官の最初の諸遊戯も、その大部分が歌を伴う、と指摘している。また歌を通して、物事を比較する思考力へ導く言葉も、幼児教育に導入される。

さて、子どもは、自分自身で自己活動的に、もっと完全に発達することのできる対象物を必要とする。自己活動の初期にある子どもに提供される対象物は、第一に、子どもがそれによって何でも表象し想像することのできるものでなければならないし、第二に、子どもに純粋に対立するものとして、一つの事物であり、一つの手段でなければならない[63]。この点に、子どもの第一遊具の性格が明瞭に示されている。第一遊具はボールである。

フレーベルは、子どもの自己発展や陶冶にとって、ボールこそは、明らかに中心点であり、融合点であると考えている[64]。「ボールは自己完結性を示している。」[65] しかもボールは、すべての事物の一般的な代表者でもある。フレーベルは、遊戯は子どもの内界や環境の鏡であり、特に幼児期においては子どもの生命衝動および作業衝動によって要求される鏡である、と見ている[66]。ボールは、子どもの活動衝動や作業衝動を子どもの本性に即して強化し、彼自身の生命法則に調和して発達させ、形あるものにする[67]。

球は、ボールよりも完全であり、面もボールより滑らかである。球が、ボールの第二の遊び仲間として現われる[68]。球は、統一そのものの明瞭な理解

と直観と保持に導かれなければならない。

球は、一つの面であり、曲面である。これの反対のものは、平面的なものであり、多面的なものでなければならない。こういったものは、ただ立方体もしくは六面体だけである。立方体は、子どもを発達に即して教育する第三の遊び仲間である[69]。

ところで、フレーベルは、万物について、「媒介の法則（Vermittelungsgesetz）」によって説明しようとする。「媒介の法則は最も重要な宇宙全体の法則であり、人類の法則であり、一般に生命の法則である」[70] と。子どもは早くから、人類の一員として、全生命の一部として、最高の一貫した生命法則に従って発達させられ教育されなければならない。しかし子どもは、同時にまたそれ自身生命体であり、子どもの遊戯や作業は、生命の諸々の表現にほかならないものであるから、子どもの遊戯および遊戯の手段と方法における媒介もまた、必然的に自然に現われざるをえない[71]。このことは、次の遊びの対象物のもとで証明されることに等しい。

球と立方体はまったく対立するものである。それらは、単一性と多様性として、特に運動と静止、円いものと真直ぐなものとして対立している。この対立しているが同等である二つの物体および遊びの対象物に対して媒介するものを要求するが、それは円筒である[72]。円筒は、円い平面における自己完結した単一性と、両側の直線における多様性とを結合する。つまり円筒は、円いものと真直ぐなものとを結合する。フレーベルは、おそらく球と立方体を子どもの第四の遊びの対象物と考えていると思われる。こうして円筒は、子どもの第五の遊びの対象物である[73]。球と円筒と立方体は、第二の遊戯恩物を形成し、またこの一個の三位一体のものは、建築術の三位一体、すなわち柱脚（立方体）と柱身（円筒）と柱頭（球）からなる柱を示している[74]。

フレーベルが、対立物を媒介によって自己完結する一個の全体へこのように結合することによって、意味づけ基礎づけられる事実を語るのは、次のことを指摘したいがためである。「すなわち、まず第一に、あらゆる時代あらゆる場所において、とくに人間の明瞭な思想、純粋な理念が形成活動によって、

また形成活動を通じて生み出してきたすべてのもののなかに示されているところの、もともと融合的で統一的な精神を指摘するためである。次に、人間の生活と自然の生活のなかに、同じ諸法則にしたがって――たとえそれらの法則が異なる発展段階において支配しているとはいえ――同時にあらわれているところの、もともと融合的な精神を指摘するためである。」[75]対立物を媒介によって結合することは、統一の精神、すなわち万物を創造し、それをより高い意識において再び統一する神の精神が示されている。「この精神によってのみ、個々の人間、諸民族や諸国家、そして人類は、長く予感し憧憬していた目標である『全面的な生の合一』を獲得するのである。」[76]

遊びの対象物は、常にそれぞれ自己完結したものであり、分離することのできない一つの全体である。しかし個々の対象物は、一つの全体の部分である。この部分と全体、もしくは一個の部分的全体であろうとする事物のこの特性に即して事物を、人間、まさに誕生したばかりの最も幼い者をさえ理解し取り扱うことは、子どもにとって非常に重要なことであるので、人間を、したがって子どもを、部分的全体の観察と認識と取り扱いへ、いくら早くから導いても早すぎるということはありえない[77]。部分的全体の思想を媒介にして、媒介の法則は成り立つということもできよう。

4　基本構想の展開

三つの論文の基本構想の要点をまとめてみる。

「わがドイツ民族に寄せる」では、神は人間の父であり、人間は神の子であるという思想に貫かれ、神の強い父性が示されている。神とイエスの関係を、父と息子の関係と同一のものと見なし、父親の本性は息子に継承されると考え、家父長制を前提としている。教育の主体は神であり、したがって教育の究極の目的は、宗教教育にあり、神との合一を実現することであると認識している。そしてこの教育は、家族内や民族内の相互信頼を基礎とする。また、幼児期の独自性と重要性が認識されている。ドイツ民族の歴史的使命を認識した上で、ドイツ民族に対する一般教育を目指している。家庭と学園の連携

が不可欠であると認識し、家庭生活と学校生活の連続性を尊重している。

『人間の教育の概要』では、万物に神的なものが宿っているという球体法則に基づいて、人間の使命は人間に宿っている神的なものを表現することであり、神的なものを表現することへの助成が人間の教育であるということが明確に示されている。人間の発展段階は、それぞれが重要であり、各々の発展段階は有機的に結合している。自然は、万物に内在している内的法則を表わし、自然は、神聖な啓示の言葉ともなる。自然や自己の生の中において、神の啓示を読み取るべきことを、あらゆる階層、あらゆる職業の人々に訴えかける。神は人間の父であり、人間は神の子であるという観点が強調され、この教育法は、神の賜物であり、神の父性愛の印であると考えられている。この教育法は、キリスト教に基づくものであり、宗教に属するものである。この教育法は、あらゆる時代、あらゆる場所に有効であるが、とりわけ時代のドイツ民族の根本要求としてさし迫った要求である。

「教育の根本原理」において、フレーベルは、時代の教育的努力の要求として、自己創造と自己活動の尊重、真の母性を育成すること、女性の使命と品位を認識すること、子どもを独自の存在として認めること、共同体の一部としての家庭生活の自覚、家庭と学校の関係を確立する努力、生の合一という教育の目標の確認などを挙げ、さらに部分的全体の自覚、活動衝動や作業衝動の尊重、対立の法則ないし媒介の法則の確認などについて論究している。また、女性が人間の最初の教育者であること、幼児期の教育における男性の役割の重要性も強調している。この論文は、幼稚園の普及という目標と呼応し、女性に備わっている自然で本能的な母性を自覚された真の母性に高め、人間の最初の教育における母親の役割の重要性を女性の使命として自覚させることを力説する点、幼児期の教育における父親の役割にも言及している点、また恩物の体系との関連においてこの教育的努力を媒介の法則で説明している点に特徴を有する。

さて、三つの論文の基本構想の際立った特徴を比較してみると、次のことが浮かび上がってくる。「教育の根本原理」には、「わがドイツ民族に寄せる」

および『人間の教育の概要』で強調されていた、神の強い父性は、姿を現わさなくなってくる。それに対して、母性や女性性が強調されてくる。この点は、「教育の根本原理」が発表されたのは、フレーベルが幼稚園の普及に全力を尽くしている時期なので、当然といえばその通りなのであるが、それにしても、父性が前面に打ち出されている「わがドイツ民族に寄せる」および『人間の教育の概要』と大きく様相を異にしている。

そこでこの点に関して、次のような疑問が生じる。フレーベル教育学の基本構想が、父性に基づく教育から母性に基づく教育へと変化してしまったのか、またこのような父性から母性への展開は、フレーベルの基本思想と関連があるのかという問題である。

まず第一に、フレーベル教育学の基本構想が、父性に基づく教育から母性に基づく教育へと変化したのではないということである。「わがドイツ民族に寄せる」および『人間の教育の概要』で父性が強調されているのは、キリスト教に基づく教育だという理由だけではなく、そこで展開されているのは主として少年期以降の学校での教育であり、したがって父性の強調は学校と関連性があると考えられる。これに対して、「教育の根本原理」で母性が強調されているのは、主として幼稚園の観点から考察されているからであり、したがって母性や女性性の強調は幼稚園と関連性があると考えられる。フレーベルは、スイスのブルクドルフの孤児院長の経験を通して、人間の早期の教育の重要性に注目するが、それは、人間の最初の教育は母親の仕事であり、女性の仕事であるとの自覚であった。素朴で粗野な女性的なものは、真の母性にまで高められなければならない。それが幼稚園の使命の一つになった。フレーベルは、幼児教育に重点を移す以前から、人間の教育の基礎に母性がなければならないとの思いがあったが、幼稚園に主力を注ぐようになってから、それまで以上に、母性の重要性を認識するようになったにちがいない。

しかし、このような母性や女性性の重視は、キリスト教が父性を尊重し、母性や女性性を否認する立場であることと矛盾しないだろうか。つまり第二に、フレーベル教育学における父性から母性への展開は、球体法則と関連が

あるのではないかということである。

フレーベルが、人間の最初の教育に母性が不可欠であり、人間の最初の教育者は女性であることを明確に自分の思想として表現できる根拠は、球体法則の性格にあるように思われる。球体法則は、フレーベル独自のキリスト教的世界観であり人間観であり人間形成の原則であるが、この球体法則は伝統的なキリスト教の教義と異なる要素を持っている。正統なキリスト教の教義では、神、イエス、聖霊の三位一体説からもわかるように、父性や男性性を尊重し、母性や女性性を否定する。ただ、歴史的に見ると、キリスト教が母性や女性性をまったく認めなかったわけではない。

キリスト教が支配的な西欧社会においても、子どもの養育に母親またはそれに代る人の手がかからなかったはずはなく、おそらくそこに母性といわれるものがあったはずである[78]。西欧にもマリア信仰と呼ばれるものが脈々と流れていて、母性への憧憬や崇拝はあったのである[79]。つまり、正統なキリスト教の教義では認められなかったものが、民衆の生活の中に暗黙の内に認められていたのである。

このように、キリスト教の中にも、また民衆の生活の中にも、母性は生き続けていたのである。その意味において、フレーベルの球体法則は、キリスト教を前提としている限り父性を尊重するが、究極的には父性と母性の調和を求める思想だったのではないかと思われる。

ところで、フレーベルが神秘主義の思想家であったとか、密かにマリア信仰を持っていたとかということも、まったく間違いではないと思う。しかしそれ以上に、フレーベルが人間の早期の教育の重要性を自覚した時、自分自身における母性への憧れや素朴に民衆の生活にあった母親による養育の必要性が、幼稚園の着想に直結していったものと推察される。

したがってこのようにいうこともできよう。フレーベルが幼稚園において母性や女性性を尊重することを明確にしたことによって、球体法則は、父性と母性、男性と女性の調和を求める思想であることが明瞭になったということである。それゆえ、「教育の根本原理」における母性や女性性の強調は、フ

レーベルの基本思想の転換を意味するのではなく、むしろフレーベルの基本思想の一面が強調されたものと見ることによって、彼の思想の一貫性を認めることができるように思われる。つまり、「わがドイツ民族に寄せる」や『人間の教育の概要』において神の父性を強調する時期に隠れて見えにくかったものが、「教育の根本原理」における母性や女性性の強調によって表面に表われたと見ることが妥当ではないかと思われる。

むすび

フレーベルは、ドイツ民族の国民的再興を、教育を通して実現しようとしていた。当初、学校構想によって教育改革を行なおうと考えていたが、のちに幼児の保育と家庭の改革という構想へと重点を移す。このような学校から幼稚園への重点の転換は、父性に基づく教育から母性に基づく教育への転換を意味しているように見える。しかし、このような変化は、教育改革による国民的再興という目的や人間形成の原則である球体法則が変化したと見るべきではなく、それらを背景とした教育の基本構想が発展したものと見るべきであろう。というのは、フレーベル教育学の全体像を見渡してみると、家庭と学校の結合という観点から展開されている学校教育学の構想が、幼稚園以後の教育を示唆しているものであることが理解できるからである。

それゆえ、フレーベルには、家庭や幼稚園では、母性が主導的で、学校では父性が主導的であるという思考法が見られる。このことは、フレーベルが厳格な家父長制が支配している家庭や学校における父性と母性の調和を意図していたと見ることができよう。球体法則は、神の父性を前提として、父性と母性の調和を考慮する思想である。

フレーベルにおいては、人間の早期の教育における母性原理から、キリスト教に基づく厳格な父性原理社会への媒介となる世界観が部分的全体の思想だったのではないかと思われる。というのは、部分的全体の思想においては、一つの全体も部分であり、人間が部分であることを自覚させることに、社会の規範や秩序に基づいて社会の中の個人の位置を示す父性原理の要素が見ら

れるからである。したがって人間が、共同感情を基礎にして部分的全体であることの自覚を通して、神との合一を予感し、父性原理社会の一員になってゆくことが、教育の過程と考えられよう。つまり、フレーベルにおける教育の過程は、母性から父性への媒介となる要素を持っているように思われる。

フレーベルが晩年に構想した媒介の法則は、教育の根本原理や発達法則にも、恩物の体系にも、万物に見られるものである。媒介の法則は、部分的全体の思想を基礎に形成されたものと思われる。フレーベルは、従来、球体法則と部分的全体の思想との関係を十分に説明してこなかったように見受けられるが、媒介の法則によって、球体法則に部分的全体の思想を取り入れ、万物の成り立ちを論理的に説明する手段を得たといっても過言ではないだろう。

注

1　F.Fröbel, An unser deutsches Volk, in:F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Hrsg.v.W.Lange, Abt.1, Bd.1, 1862, 1966.

2　F.Fröbel, Grundzüge der Menschenerziehung, in:F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.1, Bd.1, a.a.O.

3　F.Fröbel, Friedrich Fröbel, seine Erziehungs-Grundsätze, seine Erziehungs-Mittel und Weise, wie seine Erziehungs-Zwecke und sein Erziehungs-Ziel im Verhältnis zu den Strebungen der Zeit und ihren Forderungen. Dargestellt von ihm selbst, in:F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Hrsg.v.W.Lange, Abt.2, 1862 u.1874, 1966.

4　Vgl.H.Heiland, Friedrich Fröbel in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, 1982, S.69-70

5　F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.1, Bd.1, a.a.O., S.217. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第一巻（教育の弁明）玉川大学出版部、1977年、344頁。

6　ibid.,S.218.同上訳書、345頁。

7　ibid.,S.218-219.同上訳書、346頁。

8　ibid.,S.219.同上訳書、346-347頁。

9　ibid.,S.220-221.同上訳書、349頁。

10　Vgl.ibid.,S.221-222.　同上訳書、350-351頁、参照。

11 ibid.,S.224.同上訳書、354頁。
12 ibid.,S.229.同上訳書、361頁。
13 ibid.,S.231.同上訳書、363頁。
14 ibid.,S.231.同上訳書、363頁。
15 ibid.,S.231.同上訳書、364頁。
16 ibid.,S.231.同上訳書、364頁。
17 ibid.,S.231.同上訳書、364頁。
18 ibid.,S.232.同上訳書、364頁。
19 ibid.,S.232.同上訳書、364頁。
20 ibid.,S.232.同上訳書、364頁。
21 ibid.,S.232.同上訳書、365頁。
22 ibid.,S.232.同上訳書、365頁。
23 ibid.,S.237.同上訳書、373頁。
24 ibid.,S.239.同上訳書、375頁。
25 ibid.,S.239.同上訳書、375-376頁。
26 ibid.,S.239.同上訳書、376頁。
27 ibid.,S.239.同上訳書、376頁。
28 Vgl.H.Heiland, Friedrich Fröbel in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, a.a.O., S.83.
29 F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.1, Bd.1, a.a.O., S.430. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第三巻（教育論文集）玉川大学出版部、1977年、117頁。
30 ibid.,S.430.同上訳書、118頁。
31 ibid.,S.431.同上訳書、119頁。
32 ibid.,S.432.同上訳書、120頁。
33 ibid.,S.433.同上訳書、122頁。
34 ibid.,S.434.同上訳書、123頁。
35 Vgl.ibid.,S.434-435.同上訳書、124頁、参照。
36 ibid.,S.435.同上訳書、124-125頁。
37 ibid.,S.436.同上訳書、127頁。
38 ibid.,S.436.同上訳書、127頁。
39 Vgl.ibid.,S.436.同上訳書、127頁、参照。
40 ibid.,S.437.同上訳書、128頁。
41 Vgl.ibid.,S.437.同上訳書、128-129頁、参照。
42 ibid.,S.439.同上訳書、130-131頁。
43 Vgl.ibid.,S.439.同上訳書、131頁、参照。
44 Vgl.ibid.,S.440.同上訳書、132頁、参照。

45 ibid.,S.441.同上訳書、134頁。
46 ibid.,S.443.同上訳書、138頁。
47 Vgl.ibid.,S.444-445.同上訳書、138-140頁、参照。
48 Vgl.ibid.,S.445.同上訳書、141頁、参照。
49 Vgl.ibid.,S.445.同上訳書、141頁、参照。
50 ibid.,S.446.同上訳書、142頁。
51 Vgl.H.Heiland, Friedrich Fröbel in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, a.a.O., S.120.
52 Vgl.F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.2, a.a.O., S.242-245. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第四巻（幼稚園教育学）玉川大学出版部、1981年、497-502頁、参照。
53 ibid.,S.246.同上訳書、503頁。
54 Vgl.ibid.,S.246.同上訳書、503頁、参照。
55 Vgl.ibid.,S.246-247.同上訳書、503-504頁、参照。
56 Vgl.ibid.,S.247.同上訳書、504頁、参照。
57 Vgl.ibid.,S.247.同上訳書、504頁、参照。
58 Vgl.ibid.,S.247.同上訳書、505頁、参照。
59 ibid.,S.248.同上訳書、505頁。
60 ibid.,S.248.同上訳書、505-506頁。
61 Vgl.ibid.,S.248.同上訳書、506頁、参照。
62 ibid.,S.249.同上訳書、507頁。
63 Vgl.ibid.,S.251.同上訳書、510-511頁、参照。
64 Vgl.ibid.,S.251.同上訳書、511頁、参照。
65 ibid.,S.251.同上訳書、511頁。
66 Vgl.ibid.,S.252.同上訳書、512頁、参照。
67 Vgl.ibid.,S.255.同上訳書、517頁、参照。
68 Vgl.ibid.,S.257.同上訳書、520頁、参照。
69 Vgl.ibid.,S.259.同上訳書、523頁、参照。
70 ibid.,S.264.同上訳書、531頁。
フレーベルは、論文「『リナが読み方を覚えた』やり方に示されている発達に即して教育する人間陶冶の精神」において、媒介の法則に関して次のように述べている。「媒介の法則は、万物における根本法則であり、または見える世界と見えざる世界、精神的な世界と肉体的な世界における根本法則である。この法則の予感は、人間にとって彼の本質、彼の品位の最初の証書であり、最初の印章であった。人間と人類は、この法則の代理人であり代表者である。なんとなれば、人間と人類は、宇宙において神と被造物との間に中間的に立っているからである。」（ibid., S.337.同上訳書、654頁。）

71　ibid.,S.264.同上訳書、531頁。

72　Vgl.ibid.,S.264.同上訳書、531頁、参照。

73　Vgl.ibid.,S.264.同上訳書、532頁、参照。

74　Vgl.ibid.,S.265.同上訳書、532-533頁、参照。

75　ibid.,S.266.同上訳書、534頁。

76　ibid.,S.266.同上訳書、535頁。

77　Vgl.ibid.,S.267.同上訳書、536頁、参照。

78　フランソワーズ・ルークス、福井憲彦訳『〈母と子〉の民俗史』新評論、1983年、参照。
リンダ　A．ポロク、中地克子訳『忘れられた子どもたち――1500-1900年の親子関係』勁草書房、1988年、参照。

79　林道義『ユング思想の真髄』朝日新聞社、1998年、284-303頁、参照。
ヤロスラフ・ペリカン、関口篤訳『聖母マリア』青土社、1998年、参照。

Summary

A Study of the Development of the Basic Conception in Fröbel's Pedagogy
——From Paternity to Maternity——

Seikô Toyoizumi

Fröbel at first lays emphasis on the conception of school pedagogy in his pedagogy. Later he turns his attention to the importance of the conception of childcare and home reform. The purpose of this paper is to study the development of the basic conception in Fröbel's pedagogy through comparing his following three papers. His following three papers mean "An unser deutsches Volk", "Grundzüge der Menschenerziehung", and "Friedrich Fröbel, seine Erziehungs-Grundsätze, seine Erziehungs-Mittel und Weise, wie seine Erziehungs-Zwecke und sein Erziehungs-Ziel im Verhältnis zu den Strebungen der Zeit und ihren Forderungen. Dargestellt von ihm selbst".

Comparing these three papers shows that the strong paternity of God disappears but the maternity appears strongly in proportion as Fröbel turns his attention to the importance of Kindergarten. Accordingly, I explain if the education based on paternity changes to the education based on maternity in Fröbel's basic conception of pedagogy and if this development from paternity to maternity is related to "das sphärische Gesetz".